

氏名	岡道男 <small>おか みち おお</small>
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第117号
学位授与の日付	昭和52年7月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	ホメロスと叙事詩の環

論文調査委員 (主査) 教授 松平千秋 教授 藤澤令夫 教授 清水純一

論文内容の要旨

本論文は序論、第1部、第2部、結論から成り、巻頭には詳細な文献目録を附す。

著者は序論において、ホメロス（以下 Hom.）と叙事詩の環との関係について、従来の主要な学説を批判的に概観し、その問題点を指摘する。両者の間に密接な関係の存在したことは、いわゆる統一論、分析論、新分析論のいずれもが認めるところであるが、統一論はそこに Hom. からの一方的な影響を認めるのに対し、分析論は Hom. の詩の真正な部分は叙事詩の環より古く、後代に追加挿入された部分にこれらの詩の影響を見ようとする。また新分析論は原拠分析の立場から、環の詩またはその前段階の詩にイリアス（以下 Il.）の原拠を求める故に、Hom. が環の詩に及ぼした影響を軽視する傾向があり、またこれまでオデュッセイア（以下 Od.）との関係については考察されていない。従って著者は、Hom. と叙事詩の環との関係について一層広い視野から改めて考察する必要性があるとし、他方これらの詩またはその原拠が Hom. に及ぼしたであろう影響の考察を通じ、Hom. の詩の成立問題についても新しい見解が得られることを期待する。さらに本論文において扱われる資料についての説明があり、プロクロスの梗概がほぼ原詩の内容を忠実に伝えていること、プロクロスとアポドロスは同一の原拠に基づかぬことを論証し、またトロイア圏以外の詩で、環に属していたと見なされる詩について述べている。

第一部では、まずトロイア圏の詩をプロクロスの梗概があげている順に、続いてはトロイア圏以外の詩を考察する。すなわち、トロイア圏の叙事詩としては、キュプリア、アイティオピス、小イリアス、イリウ・ベルシス、ノストイ、テレゴニアの各篇を章別に扱った後、最後の第7章において、トロイア圏以外のティタノマキア、オイディポデア、テバイス、エピゴノイの諸篇について考察している。その作業の眼目とするところは、それぞれの詩で語られるエピソード（出来事）を順を追って考察し、そこにホメロス以前の要素の有無を確認すると同時に、もしホメロス以前の要素があればその元の形態を探り、それがホメロスにいかなる影響を及ぼしたかを調べ、またもしホメロス以後の要素があれば、そこにホメロスの影響があるかどうかを調べることにある。

第二部においては、第一部での考察の結果をまとめ、Hom. はテレゴニアを除くすべての叙事詩の環から何らかの影響を受けているが、一方これらの叙事詩の多くは Hom. から影響を蒙っていることが確認される。著者はこの事実を、統一論の立場から、環の詩の原拠が Hom. 以前から存在し Hom. に影響を及ぼした反面、これらの詩自体は Hom. の影響下に成立したとの見解をとる。著者はこの見解を根拠づけるものとして、Hom. や環の詩に共通する技法に、繰返し、想起、予示、パラレル、モチーフの二重化、復讐の連鎖などがあり、これらの技法が一つの詩に緊密な構成を付与するのみならず、さらに一つの詩を、その枠を越えて他の詩と結びつける機能を果たすとする。特にパラレルの技法の拡大・応用により、Il. Od. の如き長大な詩篇の成立が可能になったであろうことを示唆する。著者は、Il. Od. がトロイア戦争の全体像を反映する事実が、それ以前に叙事詩の環の前段階というべき一群の詩の存在したことを推定させるとし、これらの詩の主人公はアトレイダイであったらうという。しかるに環の詩でアキレウス、ネオプトレモス、オデュッセウスらが主役を演ずるのは Hom. の影響によるものであると考える。Hom. の影響下に成立したこのような詩の数は決して少なかったであろうが、それが今日知られる如き限られた数に限定された理由として、著者はいわゆるペイストラトスによる編集という伝承が、その解明の手懸りとなることを示唆し、第二部を閉じる。

結論においては、これまでの考察で明らかになった点が、従来の見解との関連において示され、叙事詩の環には、従来の統一論の如き Hom. への隷従的關係は認められず、むしろ Hom. を新しい観点から解釈するとか、Hom. とは異なる伝承を取り上げる傾向が顕著であることが指摘される。また分析論の主張する層分析のものは成立せぬこと、さらに新分析論のいう不自然な矛盾も大方は解消すると主張する。

最後に、従来 Hom. の最大の特徴とされた見事な統一的構成も、実は伝統的な技法に負う所が多いこと、Hom. による偉大な創造は、むしろアキレウスやオデュッセウス等に見られる如き特異な英雄像にこそ求められるべきであると結ぶ。

論文審査の結果の要旨

主論文「ホメロスと叙事詩の環」は、イリアス、オデュッセイアの両詩と、いわゆる「叙事詩の環 (Epikos Kyklos)」に属する諸作品との関係を考察し、その結果を総合してホメロスの成立問題に及ぶことを主たる目的とする。本論文は序論、第1部、第2部および結論とより成り、巻頭には詳細な文献目録を附す。

序論において著者はまず、環に属する詩とホメロスとの関係について従来提出された諸学説——大別して統一論、分析論および新分析論の三派——のいずれもが理論的に欠陥のあることを論ずる。すなわち、統一論はホメロスよりの一方的影響しか認めず、分析論はホメロスの真正ならざる部分にのみ環の詩からの影響を認めようとし、さらに新分析論は原拠分析の立場から環の詩またはその前段階の詩(伝承)にイリアスの原拠を求めようとするため、勢いホメロス自身が環の詩に及ぼした影響を軽視する傾向があり、またこの派の論者たちが少くともこれまではオデュッセイアについては全く検討していないこと、などを指摘する。著者のこの批判は正当であり、この問題を従来より一層広い視野から再検

討しようとする著者の意図は十分うなずける。

第1部における著者の作業は、環の詩をトロイア圏に属するものから順を追って取り上げた後、トロイア圏以外の詩に及び、そこで語られるエピソード（または出来事）を逐次考察してそこにホメロス以前の要素の有無を確かめると同時に、もしホメロス以前の要素があれば、その元の形態を探ってそれがホメロスに及ぼした影響を調べ、もしまたホメロス以後と見られる要素が発見されれば、そこにホメロスからの影響の有無を確める、ということである。このような作業の遂行が容易でないことは一見して明らかであり、ことに環の詩の原典が断片的にしか伝わらぬという事情がその困難の度を増している。しかし著者がこの困難を克服して、さながら道なき密林に道を開く如く、問題点を一つ一つ説明してゆく手腕は見事である。古注家を始め、近代から現代に至る諸家の見解の主要なものは、ほとんど遺漏なく採り上げ、これを批判的に検討しつつ、その間に自ら著者独自の説を浮び上らせている。例えばキュプリアを扱う章において、「ゼウスの企図 (Dios bule)」のモチーフが冒頭と結尾に二回現われ、互いに異った意味を担いながら照応して詩に統一を与え、同時にイリアス劈頭の同じ章句と、これまた意味を異にしながらかつて接続すると見る解釈、あるいはパリスの審判およびベレウスとテティスの結婚の伝承がイリアス以前のものとする論証、さらにクリュセイスのとブリセイス二女性はイリアスの作家の創造であり、キュプリアにおける二人の登場はイリアスの物語を準備する意図によるとの指摘など著者の、すぐれた洞察を示す好例である。またテーバイ伝説がトロイア伝説と深い繋りを持つという指摘も、それ自体は必ずしも著者の独創とはいえないが、論証の方法に著者独自の新鮮な発想が窺われる。

第2部では第1部の考察の結果をまとめ、著者はホメロスがテレゴニアを除くすべての環の詩から影響を受けているとし、統一論的立場から、これらの詩の原拠がホメロス以前に存在し、ホメロスに影響を及ぼしたが、これらの詩自体はホメロスの影響下に成立したと結論するが、著者の見解は概ね妥当であろう。著者はさらに環の諸作とホメロスとに共通する叙事詩的技法として、繰返し、想起、予示、パラレル、モチーフの二重化、復讐の連鎖等を挙げ、これらの技法は構成の緊密化をはかるとともに、一つの詩を他の詩と結びつける機能をも果すと説く。著者はことにパラレルの技法を最も重視し、この技法の拡大・応用によってイリアス、オデュッセイアの如き長大な叙事詩が成立し得たという。著者のいわゆる手法については、その説明にやや明確さを欠くうらみなしとしないが、著者の基本的な意図は理解できる。当初は多数に存在したであろう環の詩が整理され、ホメロスの二詩を含めてまとまりのある作品群の体裁を整えたのは、世にいう「ペイシストラトスの編集」によるのではないかと著者は推定する。一つの有力な意見であろう。最後に著者は、アリストテレス以来通説とされる、ホメロスの両詩がその優れた構成の故に他の叙事詩を圧倒したという点に若干の疑問をなげかけ、ホメロスが他の叙事詩に卓絶する所以は、むしろアキレウスやオデュッセウスの如き英雄像の創造に求むべきではなかろうかと説く。これまた傾聴すべき意見であろう。

本論文全篇を通じ、著者のギリシア叙事詩への深い親炙と多年にわたる研鑽に基く透徹した判断が随所に窺われる。我国における最初の本格的なホメロス研究と称しても過言でないのみか、欧米の学界の水準に比して毫も遜色のない力作とあってよかろう。なお主論文に添付された3篇の参考論文は、いずれも主論文の趣旨を補う好論文である。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。